

5. 天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流下の烟跡出土の近世陶磁——仲野 泰裕

天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流等による埋没遺跡については、数次にわたる鎌原村における調査が大規模に実施されており、出土資料を始めとする調査成果は、我々に多くのことを語ってくれる。その後、渋川市の中村遺跡^{1), 2)}が調査されているが、下流域であるにもかかわらず、出土資料の遺存状況が比較的良好であった。この調査では、1371点(接合後の陶片点数・以下同じ)の陶磁資料が出土しており、報告書が刊行されている。これらの成果は、18世紀中～後期の陶磁史研究に大きな指標を与えることとなった。

(1) 久々戸、中棚Ⅱ、下原遺跡出土の近世陶磁

ここで主に扱う3遺跡からは、厚さ1～2mに及ぶ泥流層に埋没する状態で、久々戸遺跡では141点、中棚Ⅱ遺跡では221点、下原遺跡では74点の陶磁資料が出土している。しかし出土資料はいずれも小破片が多いため、生産地、器種別などの出土率などについての、細かな数値等の提示はひかえるが、大きくは以下の傾向が認められる。

【久々戸遺跡】

中世陶や中国陶磁を除く全体数の4割弱を碗類が占めるが、同時にほぼ同数の4割弱が細片のため器種不明であり、碗類の実際の比率は、さらに高くなるものと考えられる。この碗類の内の3割強を褐釉碗、腰錆碗(中村-6)などの瀬戸美濃製碗、3割弱を肥前磁器碗、呉器手碗などの肥前陶器碗が2割弱を占めており、波佐見系の磁器碗、陶胎染付碗(中村-15)などが認められる。

この他、皿類や鉢類がそれぞれ6～7%を占めており、象嵌文の大形の鉢や内野山系緑釉皿(中村-16)など17世紀後半～18世紀前半の肥前陶器も一定量認められる。また瀬戸美濃製品においても、鉢(片口?、中村-2)、練鉢(中村-4・5)、擂鉢(中村-3)などの他、志野皿などが少数出土している。さらに徳利を始めとする瓶類、仏餉具、などがある。香炉は瀬戸美濃製が多い他、肥前磁器、肥前陶胎染付などが認められる。

【中棚Ⅱ遺跡】

当遺跡においても、碗類が全体数の4割強を占めるとともに、細片で器種不明の陶磁資料が4割弱を占めていることなど久々戸遺跡の出土傾向に類似する点がある。碗類では、その約半数を瀬戸美濃製碗、肥前磁器と波佐見系陶胎染付がそれぞれ2割弱の出土が認められる。陶胎染付の出土の多いことが特徴的である。

当遺跡における出土陶磁資料には、比較的大きめの陶片が含まれており、器形、生産地の特徴を示す例が多い。肥前磁器の比率が下がり、18世紀後半を中心とする瀬戸美濃製陶器の比率が高くなっている。器種では、久々戸遺跡と大きな差は認められないが、碗類では半筒形がやや多く、現川系の刷毛目碗が出土している。また、瀬戸美濃製片口鉢、擂鉢などは久々戸遺跡よりも出土点数が多く認められ、志戸呂製や瀬戸美濃製の灯明受皿(中村-10)も出土している。さらに表採・泥層中ではあるが、志野、織部(向付?)など17世紀前半代までにおさまる資料も認められ、隣接した地域に古い時期の遺跡の存在も考えられる。

【下原遺跡】

中世面が検出されており、中世に遡る中国製青花、青磁製品などが出土している。

近世陶磁については、前述2遺跡に比べ出土資料が少ないと生産地別の傾向などを窺うには不充分な点がある。ただ、碗類とほぼ同じ割合で不明細片が認められる点や、碗類では、瀬戸美濃製が他の製品より多く認められるなど、類似の傾向も認められる。

（2）宮柴前I遺跡出土の近世陶磁

同時期に調査された宮柴前遺跡（伊勢崎市）からは、221点の陶磁資料の出土が知られる。

近世陶磁が比較的多く出土している宮柴前遺跡I区においては、碗類が全体数の4割弱、器種不明の細片が3割弱となっている。その内、碗類の4割強が、瀬戸美濃製碗類、3割弱が波佐見系陶胎染付であり、肥前磁器、肥前陶器がそれぞれ1割強である。さらに皿、鉢類は、それぞれ全体の1割弱であるが、火入、徳利、仏花瓶、香炉、灯明皿などの器種が、あわせて全体の2割弱を示している。前述の遺跡群より、その他の器種の比率が高い傾向が認められる。

（3）下田遺跡の近世住居と出土近世陶磁

近年の調査例では、吾妻川左岸の中位段丘上に位置する下田遺跡（長野原町）³⁾において検出された、近世の住居跡と畑跡がある。これは住居跡を含む調査事例であり、すでに本稿において述べてきた畑跡からの出土状況とは異なるが、同じ浅間山の泥流による埋没遺跡であるのでその概要を紹介しておく。

住居は調査区の制限から二基の囲炉裏と土間を中心とする区域の検出に限られるが、18世紀後半期に使用された住居跡の貴重な調査例である。天明三年（1783）の浅間山の噴火に伴う泥流が約1.5mの厚さで堆積しており、畑跡では遺構上面に浅間A軽石が検出されている。

出土資料は、住居地区から陶磁器、小柄、煙管の雁首などの金属器、火打石、砥石などの石製品、寛永通宝などの銭貨、畑跡（45-2）からは素焼の人形、陶器、銅鏡、石製品（石臼）などが出土している。出土状況は、1号囲炉裏付近と、畑の畝の一部を変形させた円柱状遺構との二箇所に大きく分かれる。いずれも出土状況、出土資料の組み合わせなどから、泥流に押し流されて亡失した資料を想定する必要があるものの、出土した多くの資料は、ほぼ原位置を留めているものと考えられる。ほとんどの資料は、1号囲炉裏とこれに隣接する竈付近から出土しており、陶磁資料では、大小の碗類、小鉢、中形の皿、鉢（片口？）、擂鉢など16点（観察表では14点）である。報告書によれば、波佐見系を中心とした肥前磁器、陶胎染付の碗・皿類、に瀬戸美濃の鉢類である。一方、畑跡の円柱状遺構から一括出土している型成形された素焼の人形がある。細片もあり正確な個体数は検討を要するが、布袋と恵比寿（？）を含む11点（実測図11点、観察表8点、下田-1～5）が出土している。上州山間部において18世紀後半期に、型成形による素焼の人形が明確に捉えられる例はなく、その周辺から出土している銅鏡や瀬戸美濃製の香炉（下田-6）などは、その遺構や出土資料の特殊性をものがたるものと考えられる。

（4）中村遺跡（群馬県渋川市）出土の近世陶磁

中村遺跡では、3mを超える厚い泥流層の下から1371点の陶磁資料が出土している。詳細は拙稿⁴⁾に述べたとおりであるが、上記遺跡群との比較のため概要を紹介する。出土陶磁資料の生産地は、極端な偏りを示しており、肥前系52.8%（陶器21.8%、磁器31%）、瀬戸美濃系42%を除くと京焼系、信楽系、備前系を含めて僅かに1.6%であり、この他に産地不明陶器が3%、在地の土師質陶器が0.7%である。

器種別には、碗類が特別に出土量が多く全体の62.2%を占めている。その中では、肥前系磁器碗が最も多く全体の22.9%（碗の中では36.5%）、次いで瀬戸美濃系20.4%（同32.5%）、肥前系陶器碗19.3%（同30.7%）、京焼系0.3%、不明陶器碗1.3%である。さらに皿類は全体の9.6%、小形の鉢類1.7%、擂鉢等の台所用鉢類6.3%である。この鉢類の内78%以上が瀬戸美濃製である。この他、徳利・壺類、神仏具類、灯明具などがそれぞれ数%認められる。

5. 天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流下の畠跡出土の近世陶磁

以上、久々戸、中棚Ⅱ、下原遺跡を中心に、天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流下より出土する近世陶磁資料について述べてきた。

全遺跡をとおして、碗類、徳利、擂鉢などにおける瀬戸美濃製品の占有率の高さが認められる。また碗類では、瀬戸美濃製の褐釉碗や腰錆碗、肥前陶器では、呉器手碗、陶胎染付碗などが多く、京・信楽系の上絵付碗も散見された。また皿類は全般的に出土量が少ない。このような傾向や、器種別の割合などは、細片不明資料を考慮すれば、中村遺跡の例と大きく異なるものでは無いと考えられる。また碗類、徳利、擂鉢などにおける瀬戸美濃製品の占有率が、中村遺跡に比較してさらに高い傾向がある。これは、瀬戸美濃製品と肥前陶磁との間に見込まれる価額差、遺跡所在地域における当時の購買力の差などが、出土量に影響を与えたものと考えられる。

近世陶磁の研究は、近年の消費遺跡における発掘調査の進展が、三都だけでなく、地方の中核都市、宿場、農村部などを含め、次第にその幅と資料の厚みを増している。これらの消費遺跡の調査成果、生産地における研究成果が加わり、代表器種による編年観も充実したものとなってきている。そして陶磁器の流通・消費、それぞれの用途、他素材器物との役割分担、生産地ごとの棲み分けなど新しい視点からの研究が進められており、当該遺跡などの資料の集積が待たれるところである。

註

- 1)『中村遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-III) 渋川市教育委員会 1986。
- 2)当遺跡群においては、出土資料の図化の困難な例が多いため、本稿の参考実測図として、中村遺跡出土資料を引用した。
- 3)「下田遺跡」『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002。
- 4)仲野泰裕「群馬県渋川市中村遺跡出土の近世陶磁について」『中村遺跡』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-III) 渋川市教育委員会 1986。

VII考察1－天明三年の浅間泥流と畠について－

